

## 18 十二指腸潰瘍穿孔例の検討 (H. Pylori 除菌治療も含めて)

山田 明・阿部 要一・横山 恒\*  
摺木 陽久\*・佐藤 秀一\*

木戸病院外科  
同 内科\*

1997年5月より2005年12月までに経験した十二指腸潰瘍穿孔例は40例41件であった。保存的治療が27例28件に、保存的治療から外科治療への移行が3例、外科治療が10例におこなわれた(胃切除2例)。合併症は保存的治療群において横隔膜下膿瘍、肝膿瘍の2例、外科治療群においては後期の腸閉塞2例、胃切除後吻合部潰瘍1例、腹腔内膿瘍1例が発生した。経過観察が行なわれた26例(胃切除例を除く)において、十二指腸潰瘍の再発は1例であり、治療を中断した再穿孔例であった(HP未検索)。HPが検索された18例の陽性率は88.9%と高かった。HP陰性例およびHP除菌失敗例にはH2 blockerの維持療法を、除菌成功の7例に無治療経過観察、2例に維持療法を行ない良好な成績であった。

## 19 H. pylori 除菌を行った cap polyposis の1例

佐藤 知巳・岡 宏充・稲田 勢介  
波田野 徹・富所 隆・吉川 明

厚生連長岡中央総合病院消化器病  
センター内科

症例は64歳の女性。難治性の下痢を主訴に近医を受診。注腸検査にてS状結腸を主体とする隆起性病変を指摘されて当科に紹介された。内視鏡検査にて直腸～横行結腸におよぶびらんと小隆起を認めた。整腸剤やサラゾピリン内服後も症状は消退せず、腹水や浮腫も出現したために入院。高カロリー輸液およびアルブミンの投与を行ったが、著明な低蛋白血症は改善せず、分類不能型大腸炎としてステロイド治療を開始したが無効であった。その後隆起性病変に対して粘膜切除術を施行し、病理組織所見にてcap polyposisと診断した。フラジール内服を開始したところ症状、検査

所見ともに改善した。尿素呼気試験にてH. pyloriの存在が確認され、ランソプラゾール、アモキシシリン、クラリスロマイシンによる除菌療法を行ったところ、大腸の隆起性病変、陥凹病変ともに消退した。さらに胃にみられた多発性ポリープや鳥肌様の小顆粒状隆起も消退した。

## 20 H. pylori と鉄欠乏性貧血 — 特に鳥肌胃炎に注目して —

佐藤 祐一・小林 正明\*・河内 裕介\*  
塩路 和彦\*・合志 聡\*・横山 純二\*  
竹内 学\*・佐々木俊哉\*・杉村 一仁\*  
成澤林太郎\*・青柳 豊

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野

新潟大学医歯学総合病院光学医療  
診療部\*

【目的】H. pylori 感染患者では低フェリチン血症や鉄欠乏性貧血になることが知られており、われわれはこれまでH. pylori 感染者のうち前庭部結節性胃炎(Antral nodular gastritis; ANG)患者および胃過形成性ポリープ患者が低フェリチン血症を呈し、特にANGでは鉄吸収抑制ホルモンであるhepcidinが上昇していることを明らかにしてきた。今回、消化性潰瘍患者を含め症例数を増やし、hepcidinと血清鉄やフェリチンとの間の相関関係の有無や、除菌によりhepcidinの産生量に変化しうるかについて検討した。

【方法】H. pylori 感染を確認したANG患者20名、十二指腸潰瘍(DU)患者50名、胃潰瘍(GU)患者40名、およびH. pylori非感染正常患者31名、計141名を対象とし、血清中の鉄、フェリチン、およびhepcidinの前駆体であるprohepcidinの値を測定し、各疾患群間で比較し、さらにANG群11名、GU群5名、DU群27名に除菌を行い、prohepcidin値の変化を観察した。

【結果】ANG群は、血清prohepcidin値は4群中最も高く、他の3群に比して有意に高値であり、血清鉄と有意な負の相関関係を示した。一方、GU群、DU群のprohepcidin値は非感染者群より高

値であったが、血清鉄あるいはフェリチンとの相関関係は認めなかった。除菌前後では、ANG群では7例は prohepcidin が除菌後に有意に低下し ( $p = 0.018$ )、4例はほとんど変化がなく鉄欠乏状態も変化が見られなかった。一方、GU群、DU群では除菌後も prohepcidin 値に有意な変化は認めなかった。

【結論】ANG群における鉄欠乏状態は hepcidin の上昇が影響しており、除菌により hepcidin の産生が低下し、鉄欠乏状態が改善する症例が存在する可能性が示唆された。一方、消化性潰瘍患者では、hepcidin を介した鉄代謝機構が *H. pylori* 感染による影響を受けてはいないことが示唆された。

## 21 十二指腸 MALT リンパ腫の治療と長期予後

角田 知行・加藤 俊幸・秋山 修宏  
 本山 展隆・船越 和博・稲吉 潤  
 井上 聡

県立がんセンター新潟病院内科

十二指腸原発の MALT リンパ腫はまだ報告例も少なく、治療方針は確立されていない。今回我々は、十二指腸球部の潰瘍型 MALT リンパ腫 3 例に対して内科的治療を行い、その有用性と長期予後を検討した。3 症例ともに、発生部位は通常十二指腸潰瘍よりも球部のやや肛門側から球後部に位置し、多彩な潰瘍性病変を呈していた。sIL-2R は 3 例中 1 例のみ高値を示し、*H. pylori* はその 1 例のみ陽性であった。治療法として、全例で除菌を行うも消失せず、次に CHOP 療法を選択したが寛解に至らず、次いで施行した放射線療法 30Gy の照射が奏功した。その後最高 7 年まで再発を認めていない。自験例 3 例では除菌療法は奏功せず、放射線療法が有用であると考えられたが、1 例で照射後の難治性の胃潰瘍が発生した。

## 22 胃高悪性度悪性リンパ腫 (DLBCL) における除菌有効例の長期予後

孫 暁梅・加藤 俊幸・秋山 修宏  
 本山 展隆・船越 和博・稲吉 潤  
 井上 聡

県立がんセンター新潟病院内科

低悪性度の胃 MALT リンパ腫に対する除菌効果は、すでに明らかで第 1 選択となっている。出血や穿孔を除き、高悪性度のび慢性大型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) でも非手術治療が第 1 選択となり、放射線化学療法や抗体化学療法が選択されているが、除菌治療については報告が少ない。しかし、高悪性度に対する化学療法後の完全寛解は、*H. pylori* の陰性化と相関しているため、*H. pylori* 陽性の 6 例において患者希望により 3 剤による除菌胃治療を試みた。その結果、3 例で腫瘍消失を認め、6 年 4 ヶ月、5 年 7 ヶ月、3 年の長期寛解を得ている。高悪性度に対する除菌治療の報告は少なく第 1 選択とまではいえないが、化学療法の前に試みる価値はあると考える。